多様化する公共施設としての図書館

－ 新たな公共施設を考える －

志學館大学人間関係学部　岩下　雅子

はじめに

平成27年「学びによる地域力活性化プログラム普及・啓発事業／事業：産学官民による地域課題の協同的解決を促す学習交流プラットホームの形成/大学で話すみんなの暮らし」が鹿児島大学を会場に、平成28年２月６日から２月９日の３日間開催された。

事例研究Ｃでは、多様な図書館づくりの経験を共有し、「地域課題」に向き合うことの出来る図書館のこれからの在り方と専門性を探るために、全国でも注目を集めている佐賀県伊万里市民図書館、武雄市図書館の両館長の事例報告を参考に、参加者全員でこれからの公共図書館についてさまざまな切り口で考えることができた。

図書館はこれまでの図書館とは異なり、新たに多様化する公共施設としての役割を持ち始めている。伊万里市民図書館と武雄市図書館の地域課題解決への取り組みから多様化する公共施設としての図書館の役割について考えたい。

なお、「学びによる地域力活性化プログラム普及・啓発事業／事業：産学官民による地域課題の協同的解決を促す学習交流プラットホームの形成」の詳細な内容は国立大学法人鹿児島大学かごしまＣＯＣセンター社会貢献・生涯学習部門の報告書（平成28年３月発行）をご覧いただきたい。

１．多様化する公共図書館

一口に図書館といっても学校図書館、大学図書館、公共図書館、専門図書館と館種によって運営方針、蔵書構成、利用者サービスは異なる。学校図書館は学校図書館法をもとに「学校」という特色を生かした運営に重点が置かれ、大学図書館は学術図書館としての専門性を、公共図書館は子どもからお年寄りまで幅広い年齢層を対象にした社会施設としての運営を行っている。

昭和50年代（1970年代）までの学校図書館、大学図書館、公共図書館の利用者サービスと言えば､館種に関わらず「貸出し中心主義」と言われていた時代である。昭和60年代（1980年代）頃から、学校図書館であれば「学校」、大学図書館であれば「大学」という特色を生かした図書館運営を積極的に行うべきだという動きが起きてくる。レファレンス（調査相談）への積極的な取り組みは、自館だけでなく学校図書館であれば公共図書館、大学図書館、新聞社等への連携に繋がり、個人情報を守る貸出方式（ブラウン方式）を取り入れる図書館も出てきた。平成（1990年代）に入ると、従来の図書館施設や図書館家具のデザインを一新する動きも出てきて、これまでにない図書館デザインが注目されるようになった。

写真１　大学図書館を活用しての授業
（アクティブラーニング）

大学図書館も大きく変化している。アクティブ・ラーニングやラーニングコモンズが図書館内に構築され、静謐なイメージの大学図書館はアカデミック・ライブラリー（学術図書館）としての機能の中に、これまでの大学図書館が想像しなかったような様々なサービスが含まれるようになってきている。

公共図書館も然りである。少子化、高齢化、過疎化等が大きな社会問題となっている昨今、平成15年（2003年）の地方自治法改正で民間指定管理者が導入され、公共施設の運営が民間に委託されようになった。図書館運営は地方自治体による図書館運営（直営方式）と民間指定管理者（市

民団体、ＮＰＯ法人、企業）とに二分化されている。企業による図書館運営として、ヴィアクッス、カルチャアル・コンビニエンス・クラブ（ＣＣＣ）、サントリーパブルシティサービス、図書館流通センター（ＴＲＣ）、紀伊国屋書店等がある。

カルチャアル・コンビニエンス・クラブ（ＣＣＣ）が手がけた図書館として佐賀県の武雄市図書館がある。当時の市長の強力な指導のもとトップダウン方式でリニューアルされた図書館である。東京の代官山蔦屋書店をモデルに人口5万人弱の地方都市に登場したこの図書館は、これまでの公共図書館に見られない斬新な運営で全国の注目を集めている。その運営方法は図書館界を揺るがすだけでなく、これまでの図書館のあり方を再考する大きなきっかけともなった。武雄市に隣接する伊万里市民図書館は、多くの市民の支援・協力のもとにボトムアップで出来上がった図書館として有名である。

賛否両論渦巻く武雄市図書館は、「TSUTAYA図書館」と揶揄されながらも県外から多くの見学者が訪れ莫大な経済効果をもたらした。それは今まで地味な存在であった図書館が経済効果をもたらす施設となり、地方都市活性化への起爆剤となりえることを示している。人口が50～60万人の地方都市よりも人口が1～5万人程度の地方都市が独自の発想力、企画力、実践力をより発揮して地域の課題解決を図る図書館運営を始めている。全国で注目を集めている図書館の人口は下記の通りである。

・沖縄県恩納村文化情報センター
（人口10,977人　H29.1月）
・沖縄県ちゃたんニライセンター学習プラザ
（人口29,176人　H29.1月）
・沖縄県あやかりの杜　（人口16,840人　H29.2月）
・長野県小布施町図書館　（人口11,089人　H29.3月）
・佐賀県伊万里市民図書館　（人口56,034人　H29.3月）
・佐賀県武雄市図書館　（人口49,646人　H29.1月）

図書館運営について図書館関係者の議論が渦巻く一方で、図書館は直営または民間指定管理者による運営形態の多様化にとどまらず、さらに進化して単体の施設（図書館）か、複合施設としての施設（図書館）かを考える段階である。まさしくインドのランガナタン[1]の「図書館は成長する有機体」[2]である。「この町に国立国会図書館のような図書館は必要か否か。もっとカジュアルで住民の要望に応えた図書館が必要なのではないのか」等々、パブリックコメントを基に公共図書館は、施設デザイン、蔵書構成から本の検索も多様化である。ついこの前までタブレット持参で書架を歩き回りながら本を検索することが時代の最先端と思われていた。武雄市図書館の図書の分類が日本十進分類法（ＮＤＣ）に必ずしも典拠していないのは、いかがなものかと批判が相次ぐ中、最近の公共図書館では利用者が目的の書架にすぐに辿りつけるように、書架番号から本を検索できるのが主流になりつつある。書架番号の下に分類番号を併記である。これまでも公共図書館では、日本十進分類法（ＮＤＣ）による分類の枠を飛び越えて、関連本をまとめて書架に配架することもあった。独自の分類を図書館が考案し始めているのは、その延長線上にあるといえるかもしれない。

2．伊万里市民図書館と武雄市図書館の取り組み

■伊万里市民図書館の取り組み

伊万里市民図書館は「伊万里をつくり　市民と共に育つ市民の図書館」というスローガンを「伊万里をつくり」とは「町づくり、地方創生」を意味し、「市民と共に育つ」とは「市民が成長するために図書館が何かをするのではなく支援する」と述べている。時間はかかるが、丁寧に市民と対話をしながら構築した図書館には「みんなの図書館」という意識が根づきやすく、それは市民の約7割が図書館の貸出しカードを登録（H28年度）にも表れていると自信を見せる。かたや図書館にも自信が感じられる。市民目線のサービスを充実することで図書館の幅が広くなる。つまり市民のニーズに合わせて積み上げていく＝市民との二人三脚が大事でさまざまな団体、市民の力を借りて市民が図書館をどう使いたいのか常に模索しているという。

[1] インドの図書館学者（1892年生まれ―1972年没）。

[2] ランガナタンが提唱した図書館の5法則の一つ。

写真２　伊万里市民図書館外観

写真３　伊万里市民図書館（一階）

地域の課題解決型図書館という言葉をよく耳にするが、佐賀県は肝臓がんの死亡率が高いため、癌に関する本にも力を入れている。図書館が出来た日を記念する「星まつり」では、市民が図書館の誕生日を祝い“ぜんざい”を食べるのは毎年の恒例行事である。起工式では設計師が棒で地面に描く図書館の設計図から完成図を市民が想像する等、伊万里市民図書館は市民目線が徹底している。

市の交通安全の部署とのコラボで「夏の交通安全県民運動」と銘打ち体験型の交通安全イベントを図書館で実施している。縦割り行政をものとしない関係機関の連携も推進している。

伊万里市民図書館が力を入れている企画として開館20周年記念事業「図書館伊万里塾」公開講座開催（全５回）、ぶっくんの巡回（72か所で実施。市内幼稚園92、保育園19、小学校中学校17）。お話キャラバンも保育園等で職員と一緒に出前お話会、「家読（うちどく）」の推進（平成29年に家族の絆を深めるために「家読」を開始する。家庭・地域で取り組む。主題歌ＣＤ「こころをつないで」が全国に普及）、ビジネス支援の展開（レファレンスデスク、陶製万華鏡や万年筆の開発で起業の成功。家庭用小型風力、水力発電の開発や特許取得から起業化へ。東日本大震災で問い合わせが殺到。県内での水力・風力事業化へ）等がある。

今後の課題として「図書館を誰が活用するかではなく、どういう利用をされるのかを考える」「今、あるいは将来的に必要なもの、困った時に役立つ図書館とは何かを考える」「情報は力、お金となる時代。誰もが平等に情報を入手、地域間格差を失くす」「教育施設としての図書館のミッションとして、すべての人の成長（自立・自律）と成熟、自己実現を支える図書館」を挙げている。図書館は「人づくり、まちづくりを支える成長する施設」と図書館のコアになる考えに揺らぎはない。

■武雄市図書館の取り組み

図書館はまちづくりの「核（エンジン）」になれるのではないか。民間のＣＣＣと手を組んで市民にとって「便利」で「役に立つ」新しい図書館づくりに取り組む。「いつでも利用できる図書館」「居心地のいい図書館」を目指す。市民の生活をより豊かにする図書館とは、居心地のいい図書館＝「滞在型の図書館」。そこから更に一歩進んだ「提案型の図書館」を目指していく。これが武雄市図書館のコンセプトである。

写真４　武雄図書館外観

写真５　武雄市図書館（一階）

武雄市図書館は個人貸出しカードに付与されたＴポイントをはじめ、これまでの図書館がやらなかった運営方法等で批判を浴び続けている印象が強い。だが、武雄市図書館が力を入れている市民のための企画の多さには驚く。学校への支援サービスとして市内の小中学校に団体貸出（貸出期間２か月、貸出冊数は200冊）、武雄市図書館への団体見学（学年単位）、学校図書室担当職員の研修会実施（年５回）、学校図書室づくりへの支援・協力、放課後、児童クラブへの団体貸出②ユニバーサル・サービスとして市内三カ所の病院に月に一回配本サービスを実施、高齢者施設へ出前講座（読み聞かせ、手遊び等）、市報の点字サービス・音訳、③保育園・幼稚園等への団体貸出（巡回図書）サービス④語学系の学習支援（ＡＬＴの活用によるレベル別レッスン）⑤大人女性への支援（朝ヨガ等の美容趣味などライフスタイルの提案⑥中高年への支援（生活を豊かにする質の高い学びの場の提供。篆刻、古典、古文等）⑦司書講座（子どもからシルバー世代まで司書講座で図書館を深く知る等々、年間330講座を開講している。講座数の多さに驚くが、一講座の受講生を20人に限定した結果という。

リニューアル以前の武雄市図書館の課題は「利用者数の伸び悩み」「利用者の固定化」「子育て世代（30代～40代）の利用の難しさ」「講座、イベントのノウハウ不足」等である。図書館が辿り着いたのは「開館日数を増やしただけでは来館者増には繋がらない」という現実。民間の力（ＣＣＣ）を活用することで、図書館の課題解決が図られたという。今までにない「公共経営」に対する発想力、企画力、実践力を図書館が培え、図書館はサービス業という意識が徹底した（図書館スタッフに対する満足度H25年度69％、H28年度85.5％）と自信を見せる。

武雄市に莫大な経済効果をもたらしたＣＣＣの図書館経営手法だが、民間のビジネスモデルの推進は「公共経営」を掲げる図書館側と時には対立するかもしれない。そこを図書館側は、市民にとってどのような意味があり、図書館はどのような課題を見つけて情報を市民と発信しあうのかを慎重に話し合っていかなければならないだろう。

伊万里市民図書館と武雄市図書館からみえてきたのは、二つの図書館は相反する図書館運営であるとマスメディアから比較されがちだが「図書館は市民、人づくり」というコンセプトは共通している。

これからの図書館が担う新しい機能は、事例研究Ｃの参加者たちの「図書館は単なる本の貸出しという役割から地域の課題解決や人と人とを繋げる役目を果たしている」「それ自体が地方創生の起爆剤になっている」「伊万里市民図書館と武雄市図書館はライフスタイルやニーズの多様化に伴い図書館の経営や施設デザインも多様化してきている、図書館の多様性や可能性を示している」等の感想に集約されている。

３．おわりに～さまざまな地域ニーズに取り組む図書館～

テーマパークがなくとも「図書館」が起爆剤となり「地方創生」が可能となることを武雄市図書館は教えてくれた。しかし、武雄市図書館だけで経済効果がもたらされた訳ではない。斬新な図書館運営や施設のデザインの素晴らしさもあるが、古くから知られた武雄温泉や嬉野温泉が近くにあり、武雄市図書館は文化ゾーンの中に位置している。近くの武雄神社には樹齢三千年を誇る大楠がパワースポットとして有名である。大楠と幻想的な竹林に魅せられて外国からの観光客も訪れている。図書館は観光の一番の牽引力にはなっているが、そこにプラスアルファの魅力がなければならない。

伊万里市民図書館も、館内には伝統工芸品の伊万里焼で作製された陶板によるディスプレイや、全国の陶芸家が専門的に学べる「伊万里学」と銘打ったコーナーもある。また、かつての登り窯を活用した読み聞かせやお話し会、紙芝居等を行う部屋には子ども心をくすぐる仕掛けがあり、改め

てここは陶芸の町だと実感する。図書館が立派に伊万里焼の里であるという広報も務めている。

長野県の小布施町は「まちじゅう図書館」[3]「まちとしょテラソ」[4] という斬新な構想で注目を集めているが、近くには軽井沢という観光地が控えている。軽井沢を訪れた観光客が小布施と縁の深い北斎の美術館や名産の栗を楽しみに、そして話題の図書館見学と「まちじゅう図書館」構想のもと「本」と「人々」の触れ合いを求めて小布施を訪れた結果が経済効果をもたらしているのではないだろうか。

図書館の抱える課題は多い。地震や津波の災害に何度となく見舞われる日本の図書館は、その時の経験を活かして培ったスキルは全国の図書館で共有されているのか。免震対策が施されている施設として図書館の市民への災害支援はどこまで可能なのか。日本の文化継承のために被害を受けた郷土資料や古文書・文化財等を修復するための、司書と学芸員の資格を併せ持つ大学院レベルの知識を持つ専門家の養成を考えなくていいのだろうか。地域課題だけでなく図書館の抱える課題は多い。

伊万里市民図書館は、市民とともに歩む図書館づくりを目指し、武雄市図書館は少子化を見据えて子育てにやさしい町づくりを目指すことで、武雄市への移住促進を図る一環として現在の図書館に隣接する子ども図書館の建設に着手しようとしている。沖縄県の恩納村文化情報センターは観光客の誘致と地域の活性化を見据えた複合施設（それは図書館だけでなく道の駅や文化史跡、国定公園等も含めて）を構築している。同じく沖縄県の嘉手納ロータリープラザは子育てから高齢者の健康づくり、生涯教育を見据えた複合施設を構築している。

図書館をはじめ、これからの公共施設は何事も総合力で構築（プロデュース）する力が大事である。地域の課題を踏まえるだけでなく、町の将来を見据える等の多面的な視点は、多くの人々が対話を重ねることで培われ総合力となっていく。対話することで自分の地域の気づかなかった課題が、解決の糸口が見えることもある。産学官民が連携し対話を深め専門的知識を共有することで、地域課題の創造的解決はさらに図られるだろう。

[3] 自宅やお店の少しのスペースに本棚を置いて、お客様とコミュニケーション！街角に「本がある」場を通じて、人と人が繋がっていくことを願い、「いつもワクワクする情報がある」という活動を楽しむのが趣旨。

[4]「学びの場」「子育ての場」「交流の場」「情報発信の場」という４つの柱による「交流と創造を楽しむ、文化の拠点」という理念のもとで建築された小布施町立図書館の愛称（http://machitoshoterrasow.com/）。

参考文献

「大学で話すみんなの暮らし－行政・住民・会社・ＮＰＯ・学校、みんなで話せば面白い！－報告書」平成28年３月、国立大学法人鹿児島大学かごしまＣＯＣセンター社会貢献・生涯学習部門、pp.28-32。